

1

解答解説のページへ

関数 $f(x) = \sqrt{x} + \frac{2}{\sqrt{x}}$ ($x > 0$) に対して、 $y = f(x)$ のグラフを C とする。

- (1) $f(x)$ の極値を求めよ。
- (2) x 軸上の点 $P(t, 0)$ から C にちょうど 2 本の接線を引くことができるとする。そのような実数 t の値の範囲を求めよ。
- (3) (2)において、 C の 2 つの接点の x 座標を α, β ($\alpha < \beta$) とする。 α, β がともに整数であるような組 (α, β) をすべて求めよ。

2

解答解説のページへ

c を 1 より大きい実数とする。また, i を虚数単位として, $\alpha = \frac{1-i}{\sqrt{2}}$ とおく。複素数 z に対して,

$$P(z) = z^3 - 3z^2 + (c+2)z - c, \quad Q(z) = -\alpha^7 z^3 + 3\alpha^6 z^2 + (c+2)\alpha z - c$$

と定める。

- (1) 方程式 $P(z) = 0$ を満たす複素数 z をすべて求め, それらを複素数平面上に図示せよ。
- (2) 方程式 $Q(z) = 0$ を満たす複素数 z のうち実部が最大のを求めよ。
- (3) 複素数 z についての 2 つの方程式 $P(z) = 0, Q(z) = 0$ が共通解 β をもつとする。そのときの c の値と β を求めよ。

3

解答解説のページへ

座標空間の 3 点 $A(3, 1, 3)$, $B(4, 2, 2)$, $C(4, 0, 1)$ の定める平面を H とする。
 また, $\overrightarrow{AP} = s\overrightarrow{AB} + t\overrightarrow{AC}$ (s, t は非負の実数) を満たすすべての点 P からなる領域を K とする。

- (1) 内積 $\overrightarrow{AB} \cdot \overrightarrow{AB}$, $\overrightarrow{AC} \cdot \overrightarrow{AC}$, $\overrightarrow{AB} \cdot \overrightarrow{AC}$ を求めよ。
- (2) 原点 $O(0, 0, 0)$ から平面 H に下ろした垂線の足を Q とする。 \overrightarrow{AQ} を \overrightarrow{AB} と \overrightarrow{AC} で表せ。
- (3) 領域 K 上の点 P に対して, 線分 QP 上の点で $\overrightarrow{AR} = r\overrightarrow{AC}$ (r は非負の実数) を満たす点 R が存在することを示せ。
- (4) 領域 K において原点 O からの距離が最小となる点 S の座標を求めよ。

4

解答解説のページへ

袋の中にいくつかの赤玉と白玉が入っている。すべての玉に対する赤玉の割合を p ($0 \leq p \leq 1$) とする。袋から無作為に玉を 1 つ取り出して袋に戻す試行を行う。試行を n 回行うとき、赤玉を k 回以上取り出す確率を $f(k)$ とおく。

(1) $n \geq 2$ に対して、 $f(1)$ と $f(2)$ を求めよ。

(2) $k=1, 2, \dots, n$ に対して、等式 $f(k) = \frac{n!}{(k-1)!(n-k)!} \int_0^p x^{k-1}(1-x)^{n-k} dx$ を示せ。

(3) 自然数 k に対して、定積分 $I = \int_0^{\frac{1}{2}} x^k(1-x)^k dx$ を求めよ。

1

問題のページへ

(1) $f(x) = \sqrt{x} + \frac{2}{\sqrt{x}} = x^{\frac{1}{2}} + 2x^{-\frac{1}{2}}$ ($x > 0$) に対して、

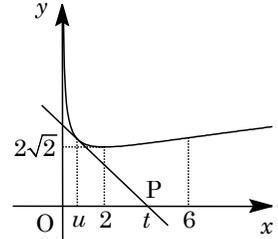
$$f'(x) = \frac{1}{2}x^{-\frac{1}{2}} - x^{-\frac{3}{2}} = \frac{1}{2\sqrt{x}} - \frac{1}{x\sqrt{x}} = \frac{x-2}{2x\sqrt{x}}$$

これより、 $f(x)$ の増減は右表のようになり、 $f(x)$ は $x = 2$ のとき極小値 $2\sqrt{2}$ をとる。

x	0	...	2	...
$f'(x)$		-	0	+
$f(x)$		↘	$2\sqrt{2}$	↗

(2) $f''(x) = -\frac{1}{4}x^{-\frac{3}{2}} + \frac{3}{2}x^{-\frac{5}{2}} = -\frac{x-6}{4x^2\sqrt{x}}$ から、 $y = f(x)$ のグ

ラフ C は $0 < x < 6$ で下に凸、 $x > 6$ で上に凸であり、その概形は右図のようになる。



さて、 C 上の点 $(u, f(u))$ ($u > 0$) における接線は、

$$y - \left(\sqrt{u} + \frac{2}{\sqrt{u}}\right) = \frac{u-2}{2u\sqrt{u}}(x-u)$$

点 $P(t, 0)$ を通ることより、 $-\left(\sqrt{u} + \frac{2}{\sqrt{u}}\right) = \frac{u-2}{2u\sqrt{u}}(t-u)$ となり、

$$-2u^2 - 4u = (u-2)(t-u), \quad u^2 + (t+6)u - 2t = 0 \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

ここで、点 P から C に 2 本の接線を引くことができる条件は、 $\textcircled{1}$ が正の異なる 2 つの解をもつことに対応し、 $g(u) = u^2 + (t+6)u - 2t$ とおくと、

$$g(u) = \left(u + \frac{t+6}{2}\right)^2 - \frac{t^2 + 20t + 36}{4} = \left(u + \frac{t+6}{2}\right)^2 - \frac{(t+2)(t+18)}{4}$$

すると、 $-\frac{t+6}{2} > 0 \dots\dots\dots \textcircled{2}$, $-\frac{(t+2)(t+18)}{4} < 0 \dots\dots\dots \textcircled{3}$, $g(0) = -2t > 0 \dots\dots\dots \textcircled{4}$

$\textcircled{2}$ から $t < -6$, $\textcircled{3}$ から $t < -18$, $-2 < t$, $\textcircled{4}$ から $t < 0$ となる。

よって、求める t の値の範囲は、 $t < -18$ である。

(3) C の 2 つの接点の x 座標は $\textcircled{1}$ の解に対応し、これを $u = \alpha, \beta$ ($\alpha < \beta$) とおくと、

$$\alpha + \beta = -(t+6) \dots\dots\dots \textcircled{5}, \quad \alpha\beta = -2t \dots\dots\dots \textcircled{6}$$

$\textcircled{5}$ より $t = -(\alpha + \beta + 6)$ となり、 $\textcircled{6}$ に代入すると $\alpha\beta = 2(\alpha + \beta + 6)$ から、

$$\alpha\beta - 2\alpha - 2\beta = 12, \quad (\alpha - 2)(\beta - 2) = 16$$

ここで、 $0 < \alpha < \beta$ から、 $-2 < \alpha - 2 < \beta - 2$ となり、

$$(\alpha - 2, \beta - 2) = (1, 16), (2, 8)$$

したがって、 $(\alpha, \beta) = (3, 18), (4, 10)$ である。

[解説]

接線の本数を題材にした頻出の問題です。(2)の結論が意表をつくものでしたので、 C の凹凸も調べました。なお、複接線がないことは、直接的には触れていません。

2

問題のページへ

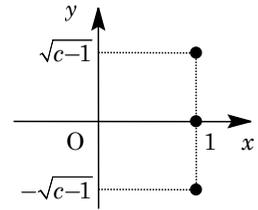
(1) $P(z) = z^3 - 3z^2 + (c+2)z - c$ に対して,

$$P(z) = (z-1)(z^2 - 2z + c)$$

これより, 方程式 $P(z) = 0$ を満たす z は, $c > 1$ より,

$$z = 1, z = 1 \pm \sqrt{1-c} = 1 \pm \sqrt{c-1}i$$

複素数平面上に図示すると, 右図の 3 点である。



(2) $\alpha = \frac{1-i}{\sqrt{2}} = \cos(-\frac{\pi}{4}) + i\sin(-\frac{\pi}{4})$ に対し, $\alpha^4 = \cos(-\pi) + i\sin(-\pi) = -1$ から,

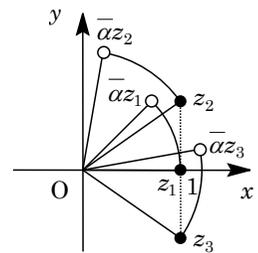
$$Q(z) = -\alpha^7 z^3 + 3\alpha^6 z^2 + (c+2)\alpha z - c = \alpha^3 z^3 - 3\alpha^2 z^2 + (c+2)\alpha z - c$$

これより, 方程式 $Q(z) = 0$ を満たす αz は, (1) より $\alpha z = 1$, $\alpha z = 1 \pm \sqrt{c-1}i$

ここで, $|\alpha| = 1$ から $\alpha\bar{\alpha} = 1$ となり, $\frac{1}{\alpha} = \bar{\alpha} = \cos\frac{\pi}{4} + i\sin\frac{\pi}{4}$ から,

$$z = \frac{1}{\alpha} = \bar{\alpha}, z = \frac{1}{\alpha}(1 \pm \sqrt{c-1}i) = \bar{\alpha}(1 \pm \sqrt{c-1}i)$$

$P(z) = 0$ の解を $z_1 = 1$, $z_2 = 1 + \sqrt{c-1}i$, $z_3 = 1 - \sqrt{c-1}i$ とおくと, $Q(z) = 0$ の解は $\bar{\alpha}z_1$, $\bar{\alpha}z_2$, $\bar{\alpha}z_3$ となり, 複素数平面上で z_1, z_2, z_3 を原点まわりに $\frac{\pi}{4}$ だけ回転した点となる。



$\bar{\alpha}z_1 = \frac{1+i}{\sqrt{2}}$ の実部は $\frac{1}{\sqrt{2}}$, $\bar{\alpha}z_2 = \frac{1+i}{\sqrt{2}}(1 + \sqrt{c-1}i)$ の実部

は $\frac{1}{\sqrt{2}}(1 - \sqrt{c-1})$, $\bar{\alpha}z_3 = \frac{1+i}{\sqrt{2}}(1 - \sqrt{c-1}i)$ の実部は $\frac{1}{\sqrt{2}}(1 + \sqrt{c-1})$ である。

すると, $\frac{1}{\sqrt{2}}(1 - \sqrt{c-1}) < \frac{1}{\sqrt{2}} < \frac{1}{\sqrt{2}}(1 + \sqrt{c-1})$ から, 実部が最大なのは,

$$\bar{\alpha}z_3 = \frac{1}{\sqrt{2}}(1 + \sqrt{c-1}) + \frac{1}{\sqrt{2}}(1 - \sqrt{c-1})i$$

(3) 2 つの方程式 $P(z) = 0$, $Q(z) = 0$ が共通解 β をもつとき, $\bar{\alpha}z_1$ と $\bar{\alpha}z_2$ は実部が 1 より小であること, $|\bar{\alpha}z_3| = |z_2| = \sqrt{c} > 1$ に注目すると, $\beta = \bar{\alpha}z_3 = z_2$ となり,

$$\frac{1}{\sqrt{2}}(1 + \sqrt{c-1}) + \frac{1}{\sqrt{2}}(1 - \sqrt{c-1})i = 1 + \sqrt{c-1}i$$

すると, $\frac{1}{\sqrt{2}}(1 + \sqrt{c-1}) = 1 \cdots \cdots \textcircled{1}$, $\frac{1}{\sqrt{2}}(1 - \sqrt{c-1}) = \sqrt{c-1} \cdots \cdots \textcircled{2}$ である。

①から $\sqrt{c-1} = \sqrt{2} - 1$ となり, これは②を満たすので,

$$c = (\sqrt{2} - 1)^2 + 1 = 4 - 2\sqrt{2}, \beta = 1 + (\sqrt{2} - 1)i$$

[解説]

高次方程式と複素数平面の問題です。 $P(z)$ と $Q(z)$ の式の類似性に着目することが, 解くための第一歩です。

3

問題のページへ

(1) 3点 $A(3, 1, 3)$, $B(4, 2, 2)$, $C(4, 0, 1)$ の定める平面 H に対して,

$$\overrightarrow{AB} = (1, 1, -1), \quad \overrightarrow{AC} = (1, -1, -2)$$

すると, $\overrightarrow{AB} \cdot \overrightarrow{AB} = 1+1+1=3$, $\overrightarrow{AC} \cdot \overrightarrow{AC} = 1+1+4=6$, $\overrightarrow{AB} \cdot \overrightarrow{AC} = 1-1+2=2$

(2) $\overrightarrow{AQ} = k\overrightarrow{AB} + l\overrightarrow{AC}$ (k, l は実数) とおくと, $\text{OQ} \perp H$ か

ら, $\overrightarrow{OQ} \perp \overrightarrow{AB}$, $\overrightarrow{OQ} \perp \overrightarrow{AC}$ となる。

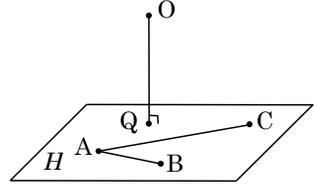
$$(\overrightarrow{OA} + k\overrightarrow{AB} + l\overrightarrow{AC}) \cdot \overrightarrow{AB} = 0 \cdots \cdots \textcircled{1}$$

$$(\overrightarrow{OA} + k\overrightarrow{AB} + l\overrightarrow{AC}) \cdot \overrightarrow{AC} = 0 \cdots \cdots \textcircled{2}$$

ここで, $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{AB} = 3+1-3=1$, $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{AC} = 3-1-6=-4$ となる。

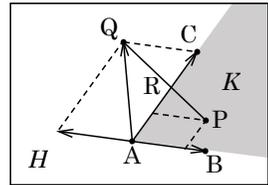
①から $1+3k+2l=0$, ②から $-4+2k+6l=0$ なので, $k=-1, l=1$ となり,

$$\overrightarrow{AQ} = -\overrightarrow{AB} + \overrightarrow{AC} \cdots \cdots \textcircled{3}$$



(3) $\overrightarrow{AP} = s\overrightarrow{AB} + t\overrightarrow{AC}$ ($s \geq 0, t \geq 0$) を満たすすべての点 P からなる領域 K は, 右図の網点部である。

すると, ③から点 Q と領域 K は半直線 AC に関して反対側にあり, 線分 QP は半直線 AC と交わる。その交点を R とすると, $\overrightarrow{AR} = r\overrightarrow{AC}$ を満たす非負の実数 r が存在する。



(4) 領域 K 上の点 P に対して, $\text{OQ} \perp H$ から,

$$OP = \sqrt{OQ^2 + QP^2}$$

これより, OP が最小となるのは QP が最小のときであり, このとき点 P は, 点 Q から半直線 AC に下ろした垂線と半直線 AC との交点 S に一致する。

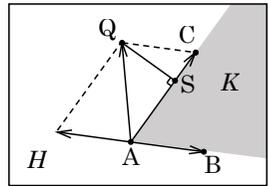
ここで, $\overrightarrow{AS} = s\overrightarrow{AC}$ とおくと, ③から,

$$\overrightarrow{QS} = \overrightarrow{AS} - \overrightarrow{AQ} = s\overrightarrow{AC} + \overrightarrow{AB} - \overrightarrow{AC} = \overrightarrow{AB} + (s-1)\overrightarrow{AC}$$

$\overrightarrow{QS} \cdot \overrightarrow{AC} = 0$ より $2+6(s-1)=0$ となり, $s-1 = -\frac{1}{3}$ から $s = \frac{2}{3}$ なので,

$$\overrightarrow{OS} = \overrightarrow{OA} + \frac{2}{3}\overrightarrow{AC} = (3, 1, 3) + \frac{2}{3}(1, -1, -2) = \left(\frac{11}{3}, \frac{1}{3}, \frac{5}{3}\right)$$

したがって, $S\left(\frac{11}{3}, \frac{1}{3}, \frac{5}{3}\right)$ である。



[解説]

空間ベクトルの応用問題です。誘導が非常に細かく, しかも丁寧です。

4

問題のページへ

赤玉の割合 p の袋から無作為に玉を 1 つ取り出して袋に戻す試行を n 回行うとき、赤玉を k 回以上取り出す確率を $f(k)$ とおく。

(1) $n \geq 2$ のとき、赤玉を 1 回以上取り出す確率 $f(1)$ は、 $f(1) = 1 - (1-p)^n$

また、赤玉を 2 回以上取り出す確率 $f(2)$ は、

$$f(2) = f(1) - {}_n C_1 p(1-p)^{n-1} = 1 - (1-p)^n - np(1-p)^{n-1}$$

(2) $k = 1, 2, \dots, n$ に対して、 $f(k) = \frac{n!}{(k-1)!(n-k)!} \int_0^p x^{k-1}(1-x)^{n-k} dx \dots\dots ①$

が成立することを数学的帰納法により示す。

(i) $k=1$ のとき

$$\begin{aligned} f(1) &= \frac{n!}{0!(n-1)!} \int_0^p x^0(1-x)^{n-1} dx = n \int_0^p (1-x)^{n-1} dx = -[(1-x)^n]_0^p \\ &= -\{(1-p)^n - 1\} = 1 - (1-p)^n \end{aligned}$$

(1)より、 $k=1$ のとき①は成立している。

(ii) $k=l$ ($1 \leq l \leq n-1$) のとき

$f(l) = \frac{n!}{(l-1)!(n-l)!} \int_0^p x^{l-1}(1-x)^{n-l} dx$ が成立すると仮定する。

$$\begin{aligned} f(l+1) &= f(l) - {}_n C_l p^l(1-p)^{n-l} = f(l) - \frac{n!}{l!(n-l)!} p^l(1-p)^{n-l} \\ &= \frac{n!}{(l-1)!(n-l)!} \left\{ \int_0^p x^{l-1}(1-x)^{n-l} dx - \frac{1}{l} p^l(1-p)^{n-l} \right\} \end{aligned}$$

ここで、 $J = \int_0^p x^{l-1}(1-x)^{n-l} dx$ とおき、部分積分を適用すると、

$$\begin{aligned} J &= \left[\frac{1}{l} x^l(1-x)^{n-l} \right]_0^p + \frac{n-l}{l} \int_0^p x^l(1-x)^{n-l-1} dx \\ &= \frac{1}{l} p^l(1-p)^{n-l} + \frac{n-l}{l} \int_0^p x^l(1-x)^{n-l-1} dx \end{aligned}$$

すると、 $J - \frac{1}{l} p^l(1-p)^{n-l} = \frac{n-l}{l} \int_0^p x^l(1-x)^{n-l-1} dx$ となり、

$$\begin{aligned} f(l+1) &= \frac{n!}{(l-1)!(n-l)!} \cdot \frac{n-l}{l} \int_0^p x^l(1-x)^{n-l-1} dx \\ &= \frac{n!}{l!(n-l-1)!} \int_0^p x^l(1-x)^{n-l-1} dx \end{aligned}$$

これより、 $k=l+1$ のとき①は成立している。

(i)(ii)より、 $k=1, 2, \dots, n$ に対して、①は成立する。

(3) $p = \frac{1}{2}$ のとき、①から $f(k+1)$ は、

$$f(k+1) = \frac{n!}{k!(n-k-1)!} \int_0^{\frac{1}{2}} x^k(1-x)^{n-k-1} dx \dots\dots\dots ②$$

ここで、 $n-k-1=k$ ($n=2k+1$) のとき、②から、

$$f(k+1) = \frac{(2k+1)!}{(k!)^2} \int_0^{\frac{1}{2}} x^k (1-x)^k dx$$

すると、 $I = \int_0^{\frac{1}{2}} x^k (1-x)^k dx$ より、 $f(k+1) = \frac{(2k+1)!}{(k!)^2} I$ となり、

$$I = \frac{(k!)^2}{(2k+1)!} f(k+1) \cdots \cdots \textcircled{3}$$

さて、 $f(k+1)$ は、赤玉の割合 $\frac{1}{2}$ の袋に対して、試行を $2k+1$ 回行うとき、赤玉を $k+1$ 回以上取り出す確率なので、

$$f(k+1) = ({}_{2k+1}C_{k+1} + \cdots + {}_{2k+1}C_{2k} + {}_{2k+1}C_{2k+1}) \left(\frac{1}{2}\right)^{2k+1} \cdots \cdots \textcircled{4}$$

ここで、 $2^{2k+1} = (1+1)^{2k+1}$ として、二項定理を適用すると、

$$2^{2k+1} = {}_{2k+1}C_0 + {}_{2k+1}C_1 + \cdots + {}_{2k+1}C_k + {}_{2k+1}C_{k+1} + \cdots + {}_{2k+1}C_{2k} + {}_{2k+1}C_{2k+1}$$

$${}_{2k+1}C_{k+1} + \cdots + {}_{2k+1}C_{2k} + {}_{2k+1}C_{2k+1} = {}_{2k+1}C_0 + {}_{2k+1}C_1 + \cdots + {}_{2k+1}C_k$$

すると、 ${}_{2k+1}C_{k+1} + \cdots + {}_{2k+1}C_{2k} + {}_{2k+1}C_{2k+1} = \frac{1}{2} \cdot 2^{2k+1} = 2^{2k}$ となり、③④より、

$$I = \frac{(k!)^2}{(2k+1)!} \cdot 2^{2k} \left(\frac{1}{2}\right)^{2k+1} = \frac{(k!)^2}{2 \cdot (2k+1)!}$$

[解説]

確率と定積分の融合問題です。(2)の設問は、(1)を誘導と考え、数学的帰納法の利用という方針を立てています。なお、(3)の $f(k+1) = \frac{1}{2}$ には二項定理を用いていますが、意味を考えれば当たり前でした。一瞬怯みましたが……。